

晚期中古音の構想

中村雅之

1. 中古音と近世音の断絶

漢語音韻史において、近世音と中古音との間には大きな断絶があり、現存する資料から見る限り、そこに継承性を認めることが難しい。例えば「洛」は前期中古音(『切韻』の体系)でも後期中古音(=唐代長安音)でも一貫して/lak/であるが、契丹小字(10世紀に創製)によっても、パスパ文字(1269年公布)によっても、近世音は/lau/である。近世音の基本的性格は、北京を中心とする地域において10世紀以降に非漢民族が獲得した漢語であり、それが漢族を含む北方諸民族の共通語になったものである。太田辰夫氏の言う「漢兒言語」にあたる。契丹人たちが接した漢語が「洛」を/lak/と発音するようなものであったとしたら、それを聞いて/lau/と認識・再現するということはありません。

2. 晚期中古音

10世紀の東部北方漢語、それがすなわち後に近世音の話し手となる非漢民族たちが接した漢語である。ここでは仮にそれを「晚期中古音」と呼ぶことにする。「晚期」には「近世音に受け渡されるべき」という含意がある。

晚期中古音から近世音への受け渡しは、北方各地で非漢民族が活躍した9世紀から徐々になされていた可能性が高いが、それに最も拍車がかかったのは、936年の燕雲十六州の契丹への割譲である。北京や大同はすでにトルコ系の沙陀族の支配下にあったが、契丹がこの地域をおさえたことで、近世音の発信地になっていったと思われる。

3. 晚期中古音の特徴

後期中古音(=唐代長安音)は日本漢音や敦煌資料(チベット文字やウイグル文字等の資料、9-10世紀のものとする)によって、おおよその姿を知ることができる。その特徴を近世音と比較すると以下の通りである。

- ①濁音声母がすでに清音化している。 [近世音も同じ]
- ②鼻音声母には非鼻音化の傾向が見られる。 [近世音ではその特徴なし]
- ③入声韻尾/-p,-t,-k/を保存している。 [近世音では閉鎖音韻尾なし]

これらの特徴について、晚期中古音ではどのようなであったかという、まず①については、晚期中古音も同様であったと考えて問題ない。②については、北京周辺に非鼻音化が生じていたと考える理由はないようである。少なくとも、日本漢音で「木(ボク)」「馬(バ)」「内(ダイ)」「泥(デイ)」と明瞭に表れるような特徴が近世音に全く見られない以上、北京周辺では非鼻音化は明瞭な形では生じていなかったと考えられる。最も検討すべきは③であろう。三種の入声韻尾は中古音らしさの代表と言いうる特徴であるが、近世音には見えない。そこで晚期中古音を考えるにあたって、どのような想定が最も妥当であるかを考える必要がある。

まず、「答/tap/」「達/tat/」など、-/p,-t/については、晚期中古音においても同様であったと仮定しても矛盾はない。契丹人たち非漢民族がそれらの内破音を再現せずに脱落させたと考えればよい。一方、「洛」「徳」などは中古音では/lak/、/tək/であるが、近世音では/lau/、/tai/であり、直接的な継承関係を見出すのは難しい。そこで晚期中古音ですでに/lau/、/tai/であったと仮定すると都合がよい。もちろん、そこに至るまでの段階を/lak/>/lawk/>/law?/>/lau/のように仮定することは可能なのであるが、今はいずれの段階にあったかということは知り得ないので、もっとも単純に考えておく。

要するに、晚期中古音の入声韻尾は、-/p,-t/は保存されていたが、-/k/はすでに脱落して母音化していたと想定すると、近世音への受け渡しが無理なく解釈される。

その他の特徴としては、微母が、前期中古音では/m/、後期中古音では/v/であるのに対して、晚期中古音では/w/であったと思われる。「亡」を例に取れば、日本呉音が「マウ」、漢音が「バウ」で、それぞれ/m-/と/v-/に対応する。しかし、近世音は/w/であり、13世紀のパスパ文字でも15世紀のハングルによる表記でも、一貫して/w/である。晚期中古音でも/w/であったと考えるのが妥当であろう。

4. 晚期中古音を想定する意義

現段階では、残念ながら、晚期中古音の体系を十分に具体的な形で提供することはできない。にもかかわらず、ここにその構想を表明するのは、これから現れるかも知れない9～10世紀の資料を扱うに際して新たな視点を提供するためである。一般に、音韻資料の解釈には無意識的な前提が大きく影響する。明確な選択肢を用意しておくことは、音韻資料を正確に解釈するための一助になる。晚期中古音の研究はまだ未開拓と言わざるを得ないが、現代中国語(普通話および北京語)の歴史を探る上でも探求する価値のある分野であることは間違いない。